

シリーズ

発達に違いのある子どもたち

「ディスレクシアの子どもたちへの支援」

8月10日、八代市にて行われた熊本県南部発達障がい者支援センターわつつ主催の講演会、「LDの理解と支援」読み書きの苦手な子の学びを支える」では、認定NPO法人EDGE（エッジ）会長藤堂栄子氏が、「読み書きに困難がある人の理解と支援」について、EDGEで取り組まれている内容を中心に話されました。

ディスレクシアの子ども達への合理的配慮

平成31年4月に学校教育法が一部改正され、障がいのある児童生徒の学習上の困難の程度を低減させるため、教育課程においてデジタル教科書（音声化した教科書）を使用することができるようになりました。しかし、読み書き困難（ディスレクシア）のお子さん、外見からは困難が見えにくいいため、読み書きができないことを「ふざけている」とか「甘えている」「努力が足りない」という誤解を受けがちです。目が見えない人が文字を読む手段として点字を選択することと同じように、ディスレクシアの子ども達にはデジタル教科書をはじめ、必要な合理的配慮を選択する権利があります。

ディスレクシアがある子どもなことが起きるのか

ディスレクシアの子どもの達は、全く文字が読めないわけではなく、ただたどしくゆっくりで不正確なのが特徴です。勝手に読み変えたり（でした↓だった、似た音のことばと間違えたり（ラッパ↓はっぱ）、似た形の文字と間違えたり（開↓閉）、読む順番を間違えたり（あした↓あたし）、電話番号を掛け間違え（9667↓9967）というようなことが起こります。また、読みの難しさに伴って書くことも難しくなり、似た音と間違えて書いたり（ら↓だ）、へんとつくりが逆だったり、字の角度、向きが変わり別の字になったり（い↓し、し↓つ、区↓凶）、電話のメモを取り間違える（9663↓9963）などが起こります。それは、ディスレクシアが音と文字をつなげる能力（音韻認識）が弱いこと、文字の形や構成している部分を正しく認識できないことなどに由来します。

ディスレクシアの人によって文字の見え方はさまざまですが、文字が躍る、動く、ねじれることでどこにどの文字があるかわからない、書き写そうとすると、どの文字のどこを写していたかわからなくなってしまうようです。フォント（UD教科書体）、サイズ、行間、レイアウト、ふりがな、背景や文字の色などの工夫があると見えやすくなり、また、色のついたシートや下敷きで見えにくさが緩和できることもあります。

不便だが不幸ではない

ディスレクシアは日本の人口の5〜8%（欧米では10〜15%）存在し、生まれつきではあるが知的に問題はなく、ステイブーン・スピルバーグやトム・クルーズをはじめ、映画監督、俳優、建築家など各分野で才能を発揮している人がたくさんいます。ディスレクシアがあると不便ですが、不幸なことではないのです。藤堂氏が運営する「EDGE」は、ディスレクシアについての知識や理解、ネットワーク、デジタル教科書作成などのサポートについて活動をされており、<https://www.ndpo-orge.jp/>で検索すると、たくさん情報を得ることができます。藤堂氏自身と息子さん（建築家）はディスレクシアで、お二人の貴重な経験談を交えての講演会でした。藤堂氏の自己紹介で驚いたことは、結婚されるまで本籍地は宇土市に有していたとのこと、なんだか光栄に感じました。書籍「ディスレクシアでも大丈夫！」では、息子さんに実際に起きたさまざまなエピソードを交え、ディスレクシアについてやさしく、見やすく、記載されています。

子どもの発達支援を考えるSTの会全国研修会

「ディスレクシアでも大丈夫！」



宇土市民会館では、11月23〜24日、子どもの発達支援を考えるSTの会（中川信子氏代表）主催の全国研修会が開催されます。2日目午前の部では、福岡教育大学中山健教授と、同大学発達支援センターに小学校6年生から通われていた、学習障害の当事者伍市さんの講演があります。中山氏のサポートの方法や、当事者伍市さんの経験された困難などを話していただきます。関心がある市民のみなまはぜひご参加ください。お申し込みは左記のQRコードを読み取り、子どもの発達支援を考えるSTの会HPよりお願いします。



子ども発達支援を考えるSTの会ホームページ